諸國里人談　卷四

諸國里人談巻之四

七 水邊部

○水辨　陸奥
○塩井　出羽
○油池　武蔵
○堀兼井　美濃
○念佛池　西国
○嶋樋　下野
○裏見滝

○若狭井　奈良
○塩泉　下野
○油泉　美濃
○入梅井　摂津
○浮島　出羽
○津志滝　安藝
○皷滝　摂津

○有馬毒水　摂津
○桜池　遠江
○竜穴　信濃

八　生植部

○曽根松　播磨
○十六桜　伊与
○唐崎松　近江
○枝分梔　安芸
○青葉楓　相模

○高野毒水　紀伊
○龍池　相模

○不断桜　伊勢
○八重桜　大和
○銭掛松　伊勢
○盃泉樋　甲斐
○印杖　大和

○観音寺笹　三河
○臥竜梅　武蔵
○遊行柳　上野
○小町苟菜　出羽
○伐レ桜　京
○物見松　美濃
○八橋杜若　三河

○大竹　駿河
○八幡木　土佐
○西行桜　山城
○一夜杖　出羽
○大樹　筑紫　近江
○大番焦　堺
○宮城野萩　陸奥

諸國里人談巻之四

七 水邊部

○水辨

水ハ坎の象なり其文横なる時ハ則川なり縱なる時ハ則川なり其體ハ純陰其用ハ純陽上時ハ雨露霜雪たる下ル時ハ海河泉井なり流止寒温ハ氣の鍾所既異なり井淡鹹苦ハ味の入不日しかるに水ハ萬化の源なり六方物の母なり飲ハ水丹資食ハ土なる資飲食ハ人の命脉なり 本艸

水ハ火より柔にして水の患ハ火より慘〳〵火ハ避へ
〳〵水ハ避へ〳〵大ハ撲滅へ〳〵水ハ如何ともする
事なし〳〵男女陰陽の氣性然り○茶經ニ云山
水を上とし江水を中とし井の水下とす下略
○谷鄉雷集ニ云泄を盆ニ又盆ニ水を〳〵添滿るに
溢れ泄水日処なし〳〵而る〳〵如凝て復塩一斗
を以一斗の水に和ぶに其水堺を

○若狹井

南都東大寺二月堂乃若狹井ハ常に水枯〳〵
毎年二月朔日より十四日まて法會あり于時寺
僧加持〳〵井に向ひ若狹〳〵と三遍唱ハ則
水涌出る此水を以墨を摺牛王を押事
恒例なり式日若狹の国警の所の渕の水酒
なり是なる明神より進せらるゝの水と云
杉の樹ハ遠敦賀の山の樹なる川乃渕と
遠敷明神ハ祭神上ノ宮彦火〻出見尊下ノ宮豊玉
姫〻 往昔國主是をうらぶし其節かの渕に
糠を蒔るふるの日二月堂の井に糠水を交ハり

十一面観音長七寸の銅佛と弘法の用ゆる出沢秘
仏の像なり牛王の庫ハ弘法大師の作と

○塩井

陸奥國會津若松より茶沢への往還六十里餘とゝ
山乃棟ゝ大塩ゝ驛あり若松より五里余ゆく
町の川原ゝ湖の泉六小二ヶ所あり大木を刳く
廻一尺き桶乃ごとくなる孔泉をうゝ此水
年来塩ゝ析ゝ岩のごとゝ此湖を汲ゝ塩ゝ焼
ゝり民屋七八十軒皆塩を焼ゝ産とし此所より
海迄八四里路より近きゆゑ唐雲南省四川省小
あゝ乃塩井を是と裏ゝの湖を浴ゝ乾を熱
此所ゝ此ゝと塩のごとゝ又浴衣手
拭等ゝ塩のごとゝ

○塩泉

下野國日光山北七八里ゝ程ゝ栗山とゝ温泉河
此所の山ゝ井ゝの洞あり此滴り湖水と焼ゝて
ゝ食物ゝつゝ味ひ焼ゝ塩のごとゝ

弘法大師乃加持有しかゝる故に四国路をとゝり系教の会しきゝ
し若温泉ハ熱の病を治する事神変ゝ

○油池

越後国村上の近所乃山中黒川村高四百八十石小方十間
余乃池あり水上ハ油浮ふ土人芦を束て水をか
きはらゝて稿をとゝ(ゝ)ハ油をすくひとる者か
ゝて灯の油とす其匂し臭しかゝる臭水油と云

○天智帝御宇に自越列獻可代油い新之水土と有
ハ則是ゝ又薪ふかゝる生あり方一尺ゝり平の毛程
ふ切口ゝ有ゝ(ゝ)あて薪とす或人越後ゝ国土と併て爰ゝ義
○又土中より掘出ス薪ハ伊加賀近江ゝ有ゝ
土あゝ底ゝの板ゝ命ゝの板ゝ二三尺ゝ有ふして塩土
ゝ数日乾ゝ水気ゝ有ゝ時樊ゝ上品の炭ゝ
堅ゝ是をウニと云

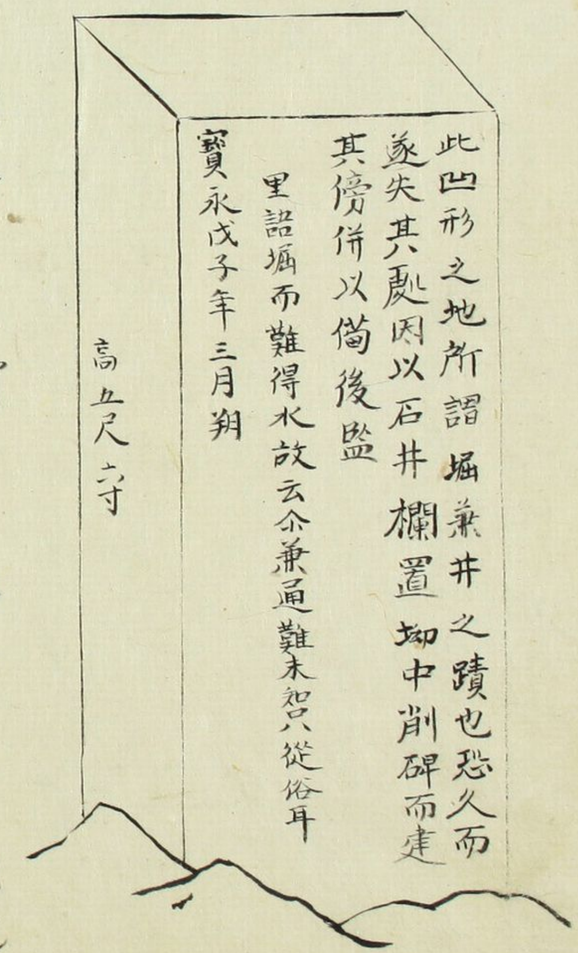
○油泉

美濃国谷汲の開基豊然上人延暦年中草創の
時ゝ其地ゝ平均ゝ有ゝ此の巌ゝ数ゝ八石中ゝ

油涌出る豊無拵云て〻く我[光地ヵ]わ〻〻大悲の像
を安置して〻〻廣〻利益せ〻永久にあ〻
まし〻〻まうしめるりとひわるを別油涌
出る事泉のまと〻〻豊然大ふとろろ八十一面観音
を安置せ〻れる其長五尺の像〻を乳後延喜の
帝その踏蹟をしきこ〻めを乳額を華厳寺
と賜ふ其油涌く微〻きるれど〻〻前の常灯と
なりてほど八分以あり

○堀兼井

武蔵國入間郡堀金村ふ高き山ゆ浅間宮の梵下ふ
少〻窪めるふ堀兼の井の跡あり方六尺ばかりの石
を窠〻て井桁と〻ずハ堀〻て苔む〻〻り傍ふ
碑あり近き頃川越の人の建〻し
川越より二里 赤甲の方
千歳
たさ〻〻形ばかり永の井とあるの跡を尋〻ふ近つきふるり 復成



ハあり小堀兼井と称ふ不美〳〵ハ不を法間堀
兼ふ是より五六町南ハ方二十間ばかり堀のま
〳〵窪めるハこれ其井の跡と云又乙女新田

或ハ入曽里ともあり起〳〵て此ハ土地高〳〵て水を
得ふ〳〵ふ〳〵堀ふ里諺小堀〳〵真跡を
遂〳〵ふ堀金の名水ハ堀金井ふを兼の字
城書ハすこの所ハ矢子ふり（享保九辰の夏三
緣山増上寺塔中清光院昌泉院の退院むさ〳〵野ふ
優起〳〵堀ふ乃井を温ふ本ハ高ふ〳〵ふ
ふ〳〵発掘ふ〳〵ハ〳〵き男女第を扶ふ
びてかづきふ〳〵ふを北ふ〳〵ふ新ふ不て末の跡ふ堀
ふの井をふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵

ゝて氏石を求り是をしして実盛の地なり氏
井をうきて掘ごりあり むゝ川越乃城主す蓮実
度〳〵鯉を献ず 仗の者氏井をて水をそそぐあや
まつて氏井を穿ゝ奴彩米あるを穿て川越より
掘りゝ穿ごりをつゝみ惜き者のすぎ形を珠
をゝれりそれきかの老
武蔵型氏りの井の井の色ふゝれそあひすることを一色
と雨ゝてもゝりうゝ山僧遠遠孫なるゝ弔ひ
跡ゝ〳〵なる西僧都ゝ〳〵 僧の菴室

より光僧そ我々ゝ〳〵あめ何めるかる事をきゝ
今掘ごり有ゝ八ゝるゝ人と云西僧ゝて通彩人を
ありをゝかの老を郡ゝ小基彩方戒を氏かの奴
ゝ亡霊るゝんと吸府の後演参白隨大僧正小氏ゝを
ゝを別戒名を授ゝ弔ひありをる昌泉院ゝ名
塔を立ゝ奴ゝ墓をて今あり去りゝ申八ゝの年
より十七年ゝ当ゝ年忌の弔ひありをゝり

○入梅井

摂津国矢田郡丹生庄原郷村栗花落尤慈門がや

しきの内に井あり深さ一尺ばかり四めの
石垣にて水涌出づる入梅なれば入梅の春の
後九百三十五年ばかりの頃柘榴花咲て用き栗花
餘落ち執草梅莫の絶を以入梅の字を用ひる式歟
姫御前は真勝と云ふ横佩右大臣の聟にて累代の
家にて豊成公の娘白玉姫は中将姫の時より中夏の
比地にあらずして蛍に遊戯をし紙を以て袖を作て
天に祭りし其地にて水涌出づ今の中夏の候
を云ふ也云り

○念佛池

美濃國谷汲と坂乃下との間に小き池あり後世橋
を念仏橋と云ふ池の中に石塔あり旅人の立て
ふを見て健毒乃人橋の上にて石塔に向ひ
念仏唱へ水面玉のごとく沸くと涌ごとく泡
だちて唱へ終ふ念仏唱へ泡を責念仏
をやめば泡消てその泡多く立て念
佛池と云ふ

○浮嶋

出羽國最上郡羽黒山の麓仏澤の大沼よりあり
延袤六十六の浮島阿り鍾り高八尺一丈三尺ハ
動くもの〳〵國〳〵の谷阿りとゝへとも名州なる人稀
て大き成蛇を奥列岩といふのゝ中り池の中ハ
動くもの大き成菰蒲生うもしを芦茅ハ
六十余の蛇〳〵常ハ汀より岸ハ副〳〵あり
皆松柏茂り桃櫻菱山吹を生り春夏秋を
〳〵日毎ハ浮〳〵旋る風ハ吹ても尾ハ宮
行もあり時〳〵て二十蛇三十蛇とうゝ巡るゝ春夏
花乃盛ハ菱山吹ハ〳〵ちつゝの水ハ映じて風景斜
なるハ〳〵の蛇〳〵汀ハ多時出んとする蛇ハ震き動き
出〳〵出ざる蛇を押ハ〳〵て出るの人有〳〵て北志不の蛇を
伐ふ事あり

○嶋遊

西國海上ハ廻船夜泊撰て沖中ハ碇をおろ
〳〵海ハ事あり浦夫ハ夜〳〵間近きハ一ツの蛇出
来して樹木民屋を巻ハ形ハ人あるまて

商人の物賣絶るとて髣髴たる雲の間より
八枚ちらきみ形や書けんとうるふみ明き八姫を
形〻眺〻うる海原こゝ爰もうるぶと〻見を
毎の拍ひとゝ〻り寸事
案〻ふ蜃氣樓乃類ひるゝ〻

稀のすし

○津志瀧

安藝國山縣郡津志瀧乃上ハ靈験の觀音あり瀧
のもみ潛石ゝて内ゝ五〻ゝあり瀧水きみあさ
つ〻張り浪を飛ふ參詣の人傍みゝ〻瀧
水ゝ〻ゝ鳴〻〻念ゝ入ゝ〻ゝ〻ゝ〻

明王あり是我見を者忍師て敬たてまつる事か
〜不浄の人益まさき八天狗のあ命を失ふ
と云り

○鼓瀧　蛛滝　有馬桜　屏風岩　高塚清水

摂津国有馬郡湯本の南八町ばかりあり水乃
落る音鼓の声に似たりゆえに名付たり
八町山奥に蛛滝といふあり蛛の網をはりうるめく
ゐ四方へ引て落るゆえ彼の院の傍に有馬桜と云
名木あり○屏風岩四十八瀬川の内にあり弘法大師
六字乃名号を此岩に書給ふ雨降て濡せば字
見ゆるとぞ　高塚の清水と云冷水あり
秀吉公有馬入湯の時茶の湯乃水とす

○有馬毒水

湯本乃南五町ばかりに池あり此水毒あり印
の辛酸なるあり語て曰ハ人此毒を飲ハ即死す毒虫
此毒ふ觸れを又死すとぞ地獄虫の地
獄と云ゑ谷を地獄谷とぞ

○高野毒水

紀列高野山ゟ玉川と云あり毒水ゟ毒あり傍
ゟ碑を建ツ

弘法大師

ながれをくむやとりん旅人乃手水の奥の玉川の水

○桜ヶ池

備後阿部梨皇国ハ源空上人乃師ゟ比叡山ゟ
ありてを九頭明王山の雄ゟ寄る皇国いとく
長寿ハ蛇身ゟ成ると吾蛇ゟ成と孫勤の世世
を待へ〳〵遠列桜ヶ池ハその深きゟをしきく
ゟ身ゟ信ん上と此所の時ゟ池の水を掬ゟ其時

池水大ゟ騒〳〵皇国入寂ゟ日時ゟ雨ゟ降ゟ至〳〵
風夜ゟ雷鈴の音池乃色ゟ赤ゟ中ゟ云り池ハ
遠江の国笠原庄桜村ゟ男池女池ゟて方五町ゟり
の池二ツあり桜ヶ池ゟ云池の社ハ牛頭天王ゟり
毎年八月彼岸の中日午の刻ゟ半切梅ゟ赤飯
を盛りて水陳ゟ遠ゟ去ゟるゟ見を押ゟ池の
底中ゟ点ゟ入ゟて押ゟる其底ハ今ゟの岩ゟ
激ゟ流〳〵ゟ于時池水渦巻て赤飯笠水面ゟ
沈ゟ叶飯笠ハゟ九教定ゟ所皇にゟ已

三ツ七ツ或ハ五ツ年〻ニ増減あり事

○龍池

相列江の鳴窟のひくの方に穴あり海際なり

ヘ十ツ浪そんの穴ニ入ル水底ハ底不弁

天出現の石と云り○此嶋の破ル福石といふ有り

け石北前ニて時あり八月ハ貝ハ拾ハ福

をとうと云又傍ニ蛙石あり形ハ似ル

○龍穴

信列安曇郡の山中ニ峠〻ニ里の山峯多

神の社下ニ大きなる穴有り其深さ梓川と云て

善光寺の岸川の水上なり大河流れり此川水流れ此穴ニ入水未

ゆくゑ知れず

里俗云近世殖産の者有て其奥をたずねと

炬火を以て水の涸る時此穴ニ入て凡三町ばかり

を行くに高きなりなるまぐさき風吹て松明を

消ス何とも怖しかりき凡八丈ばかりの

上ハ岩ばかりなり

八 生植部

○曽根松

播磨國印南郡曽根村あり天満宮の神木と相傳ふ菅公筑紫へ起き給ふ時小寓し給ひ此所小松を植き邪正栄枯を誓ひ給ふと云り其松枝葉ちり〳〵今扶桑第一の名木と称す

高サ一丈三尺　周り一丈八尺　乾より巽へ指て七丈艮より坤へ延り十一丈　這枝毎年数百本

○不断桜

伊勢國白子の寺家村観音寺の堂乃前ゆ木乃桜あり四時ゆ花開り盛乃花の如くゆゑあゝ葉かゞ生ず五七輪乃花常ゆ絶ず安寺ゆ子安の観音と称して霊験世ゆ知る所なり此御木を産所ゆ安産なしハ必安産なるゆ此寺家村一郷ハ勿ゆ女五月常を忌ゆ昔より今以かゝらざるなり

○十六桜

伊予國和氣山城村弓恩寺の林の中に一本の桜
あり毎年正月十六日に花咲ゆゑ此名あり昔
当寺の住僧実より此桜をうえて我子桜と
名付り老衰に及て病に引こもり居たりし
をしるまもなき命へ終に臨終
に臨む日花咲ゆゑ此日花咲とし
月十六日に咲ゆゑ此日花咲とし

○八重桜

南都東圓堂の前に美形の八重桜あり一條院の
御時上東門院に仕る女房庭に植て栽給へと
を奥福寺の別当に命じ給ふ別当命を受て
霊木を伐出さんやと諍論する内に石
さた者をきこゆるに誠に法師心なき
あるべしゆゑ花を出せ出せ伐流の衆
門に入て減し給ひ今より此桜を呼んで我が桜
と稱へ一旦後世に他へうつすものある
ゆゑ伊賀國戸野の庄に附せられ毎年

乃花の時墻を囲ひて花を愛し寺もまた是に倣て
市野村なる花墻の庄と號しけり其後まぢかく
城平安城に移し栽られきとぞ

○唐崎松

近江國志賀郡唐崎乃松ハ一茎一葉に名高き名
木なれ世も知る所なり後水尾院はその名をよ
ませ給ふ

鏡山人のたりかさねて我庵の上をとりて海
志賀浦ハ三井寺と坂本の間に唐崎花園里を

相列る

○錢掛松

勢列窪田と掠本の間に茂園里あり相傳ふむか
春宮去る人は聖の長きを倦て此松に行程何の
ど有ときに里人いふもまた十日行茂園郷七日行
長野の松に比ふ所なり抵然に貫文の銭を此松が
元なかけて変より大神宮を祈りて願ひきる
他の人彼銭を見ふ蛇の蟠りうやうやしくて
あるを云人好て彼ものの故に願ひて後あきむる

きこゆ年をしきこゝてはたゝ又養して是
をしるべしかけ方の海ゝの角にありもろ〻ゝ
ゝ〻は名有と云り

○枝分桃

安藝國新庄村と佐東村の界に大木の桃一樹有
南ハ新庄北ハ佐東のゝ桃佐東のゝさゝ
枝ゝ桃花〻〻新庄の方へさゝる枝ハ年毎ゝ
大人の云むゝ弘法大師佐東ゝ桃を植ゝ
これゝゝ高花〻人のゝ毎ゝあると云り

新庄ゝ〻ゝ毎ゝ年毎ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
故ゝ一木ゝ年花の味ひあり〻

○無波樋

甲斐國二の宮乃社地大木の樋あり波ハ皮のゝ
ゝ〻仁ゝ波ゝ〻ゝ白ゝ〻ゝ種を他ゝ載ゝ
生ゝ〻ゝ

○青葉楓

武藏國金沢稱名寺の堂乃東ニ一木の楓あり
藤原の為相卿

いかゝて廿一本の孔雀山ふさきゝ花のみうえ
此寺ゆゝしこの外紅葉なとゝ金閣小八木の名林切り
新謂 西湖梅 黒梅 桜梅 文殊梅 普賢象桜
蛇混柏 一ツ松 青葉楓等ゝ

○印松

和刻三輪ゝ印松とゝ云あり 柳陰ゝ伊勢国奄
藝の郡の猟人異ゝ女ゝ多逢ゝ一子を儲ゝ後母ゝ
ゝ形方ゝ
高ゝゝゝ尋ゝて見よゝ宿ハ三輪の山ゝ松ゝゝ門

此寺を弥ゝ勝ゝ夫神ゝのゝふゝきを敬永ゝ
三人同ゝ神ゝとゝ崇社の祭ゝ勢列奄藝郡の人
未ゝゝ土ゝ氏ゝ八ゝ謂ゝと云ゝ又日本記四年
紀等の説あり

○観音寺笹

三河国保飯郡小松原観音寺の本尊ハ馬頭観音
ゝて行基菩薩の作ゝ毎年二月初午ゝ山ゝ入ゝ
参詣乃人環笹を得ゝ海ゝ馬の形ゝ特御
形ゝ厩ゝ呈ゝ孔笹ゝ孔ゝ忍金ゝ奇

なり又南海を渡る船此堂の前を通る時帆を
下げざれば取くる船あり依て諸船も皆帆を下る
なり

○大竹

駿河国府中の寺の元禄年中の頃一夜の中庭
ふつと山のごとくなる地凸よりうあやと見るみ
一夜のうちに筆生出り近隣の藪なる竹共
日を追て成長し竹の幹通りを
凡三尺周りあり未聞の事なりと諸人物見た

一年序番元見物の事座敷の不整なりしを
住僧の云所全此竹ありて人々海岸の事
と奇事を伐る人々見を配分しく思ひ
笠物を拵へ老り九度たること盆樽などを
或人飯注ぎとして仕へ人へ扶来り土産ふせしと
其笠を為る人の如く其大さ凡八寸あ
りしとなり

○臥龍梅

武蔵国葛飾郡亀戸村にあり梅屋敷と称し実

木はさ八丈の藪きるおとくとも枝の末地中み
入く幹と成枝とりて這ふ事十余丈小朶
左右ゟ流まく枯高く八花の盛八苔こくして
四方ゟ蔓延て菓八大なる桃のゆ〳〵味ひ甘く破〳〵
毎〳〵抱歓の人詩歌連俳紙筆是ゟあるく
車馬ゟ器

○八幡木

土佐国野根山街道の傍ゟ檜の株あり往天五尺
ゟ餘る迄八幡宮利村の八幡宮の社
八他の木を掘た此一樹を以極屋根板まを要く
成就た川く俗ゟ是を八幡木と唱て国
ゟ注連を引て崇む社ゟ八方四五間ゟ有り今
に存ス

○西行桜

山城国嵯峨法論寺の南ゟ桜元庵ゟあり西
行上人の菴室乃旧地ゟ此所ゟ大なる樹一樹あり
是を西行桜と云又西行桜ゟ西行
庵園ゟ○憲清入道ゟ園位と号後ゟ西行と

改の國にて怒り過りて合所古碑乃地にて和歌
を詠ず是をこのもの関東にて詠ずの時家僕し
発心して相模に名を西住と云て遠江の國天
竜川乃渡りにて船に乗人多して乱花
僧達下りて跡に船に云り便船に旅僧
乃常と云て退て二人の船長大に怒りて憤き
法師の此事なれと西行の心を折て血流きうう
西行憤る事なくして船より去る西住去きを
見て患悲しく船長と争ひ及んとする時西行先
城製し金都を出る時より墨染に新のさくに成り
を初る何そ去まを愁へ此度若筒の有しに此ハ
伴ふへきとて西住を古郷に海に乗り独行
也

いとを恨ハ人ふかんと思ハ人のさるの　西行

○遊行柳

下野國芦野にあり真列奥柳の本に清潔乃清水
流きて傍に社あり温泉大明神と号　西行
道の色の清き流に柳陰とまりて去がり先

此歌よりの名なるべし然るに八雲抄にハ西行桙とつくべしとそうし
抑ハ桙の精霊遊行上人を遊うと云附会の説より
起り桙と云

○小町芍藥

出羽國雄勝郡院内湯沢より駅ハ秋田より會津へ
乃往還なり此宿の間小町村とつゝくむら岩ハ生
郡司好実の住居地なるより小町村ハ小野の小町
乃出生の所なりとて小町の宮有その流れなりし
つゝ〳〵さと世〳〵百姓あり村より代家ハ

女子なり生じて男子なし生代〻知耳なしとなり
猟なり年〻咲かるゝ又田畑乃畔ゟ芍薬九十九株あ
是小町の植られ〻共種とり代芍薬をとけて他ゟ
うつるみなるしなれ共花の盛の土地ゟ代
らん色なるなし此花を折ハその角崇りあり
大樂なるすなるゝ坂をきびゝくかゝ是なし
私云
九十九とゝ云事を小町の母にゝハ深草の母物語
夜通ひしるなり世ゟいひつゝ又ゝ老ぬ
ゝもたゝぬ世ゝくゝなるこの家ハ山ゟ拙ハ小町の

乃やふゝ伊勢物語ゆゑかゝる小所の事ふ
あんけ不の苔茶九十九株ふちばさるゝ八ふ
しきるとゝのゆゑの弼ゝ九十九株踏ゝ
うゑゆゑあるゆゑあるゆゑ

○一夜松

同國同郡院内より五里ゝ南ゆ松の文ゝあ
ゝ三嶋明神の社あり此所の松一夜降ゝ
ゝゝ九万本の松梢切ゝ
ゝゝ他ゝゝゝゝの林

ゝ

○伐桜

京都東福寺の北殿司八名画ゝ將軍義持公
ゝ時ゝゝゝゝ一四北の意ゝ詞ゝ望む所あ
ゝ則遊ゝ明北のゝ歟賢官爵ゝ望
ゝ一衣一鉢吾ゝゝゝ足ゝ
ゝ近不須東福寺の九僧ゝ桜樹ゝ栽
ゝ後世ゝ精舎爰ゝ庭妄の他場と
ゝゝ命ゝ奉ゝ是

を伐らしむ今おいてらく寺中の樹ぬ

○大樹

景行天皇十八年の筑紫系の道の後の國の行幸時
の倒まてる木あり長九百七十丈百官その木をまたぎて
往来せり天皇問て云是何の木ぞ一の老夫ありていふく
此木ハ櫪ぞ昔倒ざるのさきに旭の暉まあたりて八則折
島を隠し夕日のかくやくまあたりハ阿蘇の山をか
くしき　日本記

○又云昔江近國栗本郡の大なる杉の木あり其
周り五百尋枝葉繁茂て其木の影朝ハ丹波まで
夕ハ伊勢國まさしされハ滋賀栗本甲賀三郡を蔭
を覆ひ日光あらされハ田畑の作物熟ぬ百性是
歎て其由を奏せしかハ帝寺宿祢を使しむ　後記

○物見松

美濃國垂井と赤坂の間青野原の熊坂の物見の松
あり柳伊予守昔長範考松のうへに登りて往来の人を
うかゝひきりとりしと熊坂ハ後國関川と小田切の

間ゟ熊坂村といふあり此所の生産なりと云

○妙國寺藤鉄

泉列堺妙國寺ゟ番鳥の大樹あり高一丈三尺叢生
ゟして十三本周り株二丈比類なき名樹なり客殿
の箆山ゟ河内故ゟ移さゟ格子を付く外り足ゟ
やうふして直し寺ゟ不審合順れゟ来りて何と心乃
けゟ寺きを作し数来数珠を投るにより近年
格子の所ゟ賽銭箱を設く

○八橋杜若

三河國碧海郡八橋山無量寺の杜若八世ゟ聞て
名草なり此杜若八四葩ゟして炮花の蜘手のごとし
水引川の蜘手ゟ云ふ八僻ゟ事ゟ蜘手八流の事ゟ
あれ花形の名なし

○宮城野萩

奥列宮城野の萩八木萩ゟして灌木のごとく長常の
草萩ゟ異なり弓なり作ゟ木ゟ又本ゟあり本萩
ゟ云ふ八枝ゟ青き枝生ゟて花枝ゟ咲ゟ本の
あゟハなゟと云ゟなし

宮城野の中あり本萩原なりと爲て見たる人見たるの
むかし爲中とふ人みちのくの任ありきたる任たる
ゆかりなりきる時宮城野の萩を長櫃十二合ふ入て
登りもれ八京入の日二條大路ふ人見くあり
車あるを見たるなり云々

里人談四之終

水田氏所藏